沼津市明治史料館通信
二〇一九年七月
通巻138号

■ぬまづ近代史点描　82
盲教育史に名前を残した五十川中
■令和元年度第１回企画展の紹介
■史料館からのお知らせ

THE FAR EAST. 157

MR. DENNISON, the U.S. Marshall, returned from Shanghai in the P. M. S. S. *New York*, having in charge the man Rogers who is charged by the Japanese with making false kinsats. The Prisoner is now lodged in jail waiting further investigation of the matter. We hear the Japanese authorities are determined to prove the case if possible and have engaged a legal practitioner to get it up for them.

———

A NUMBER of the Straits born Chinese have offered their services to the government to be drilled and formed into a local force under European officers so as to act in case of further riots or emergency. There is still a good deal of fighting going on amongst the rival clans in the villages round Singapore.

———

WE hear of a most daring robbery that occurred during the week in the R. M. Camp. New quarters are being put for some officers, to replace the huts that had to be taken down to make room for the new U. S. Naval Hospital. One of these huts being nearly finished a stove was put in it and all made secure for the night. The owner, who intended

pigeons as the re
they wish us to r
of the officers an
which they passe
high overhead w
a river along wl
soon at it fell wa
it, and nothing r
after an officer w
He said having h
bird which had b
and having take
apologise for thei
In another in
fallen a long way

COLLEGIANS, NUMADZU.

『THE FAR EAST』よりヌマヅ・カレッジアンズ
（当館蔵）

『ザ・ファー・イースト』は横浜で発行されていた英字雑誌で、まだ写真を印刷する技術がないため、生のプリントを紙面に貼付するスタイルをとっていた。富士登山を目的に駿河国を訪れたイギリス海軍士官ら３名が沼津兵学校・沼津病院に立ち寄ったのは明治４年（1871）７月９日のことだった。その際、イギリス人のカメラで撮影されたのが、この沼津兵学校の生徒たちである。『ザ・ファー・イースト』第２巻第13号（1871年12月１日発行）に掲載された。対応する英文記事（７月５日～８月20日「富士甲信紀行」の一部）の翻訳は、『沼津市明治史料館通信』第２号に掲載したので、ここでは略す。なお、貼付写真には生徒たちの位置やポーズが若干違う別バージョンも存在する。みな散髪・和服で無刀である。判明している沼津兵学校資業生のポートレートと比べてみたが、残念ながら顔から氏名が判明する人物はいない。この写真を紹介した文献には「沼津兵学校の資業生たち」とのキャプションを付しているものもあるが（『第二期物語藩史』第四巻、1966年、人物往来社）、兵学校には資業生以外にも附属小学校の生徒たちも多数いたはずなので、個人を特定するのは無理なのかもしれない。　（樋口雄彦）

T very successful shooting excursion. They report a bag of 455 snipe, 3 geese, 1 crane, 2 quail, 2 mallards, about 20

THE Sultan of Borneo has ordered a wooden screw steamer to be built for him at Singapore.

e thing
civility
through
se flying
side of
bird as
y with
e time
st bird.
taken a
culprits
it and
having
E rea-
son g
for the great
stringency in
the money
market at
Shanghai; is
that many
Chinese mer-
chants have
tendered for
the monopoly
of selling salt
and have
taken away
large sums
with them
(amounting it
is said to over
three million
taels) th
vilege having
to be paid for
at once by the
person who
obtains it. Of
course when
it is known
ai again
ogs it is
ed from
hen, all
a large
zing to

ぬまづ近代史点描　82

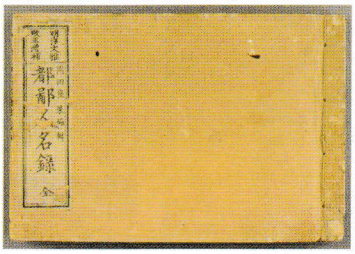
盲教育史に名前を残した五十川中

沼津藩士の五十川中（旧名左仲・静）は、御者頭・御目付・教授文学などをつとめ、沼津城下において私塾善学塾を開いたほか、藩主水野忠誠に招聘され学政改革を実施しようとした出羽国の浪人学者阿部千万多（誠蔵）に反発し、江戸で阿部襲撃事件を引き起こした庵地福太郎らとともに脱藩し、捕縛後に罰せられたことでも知られる。処罰時の取り調べ書類に、「御政事筋」にも口出しするようになり、依怙贔屓や悪口など阿部の「行状不宜」を弾劾するためだったとあり（『近世庶民生活史料藤岡屋日記』第十三巻、一九九四年、三一書房）、対立の原因は阿部主導の改革の是非をめぐる争いだった。阿部派と五十川派の違いは、二人の学統からいって洋学対漢学という構図ではなく、漢学者同士の争いだったと思われる（『老母を圍んで―沼津水野藩士の娘奥居富女聞き書―』、一九三七年、白濤房、一九七五年復刻、沼津市立駿河図書館、六九頁）。

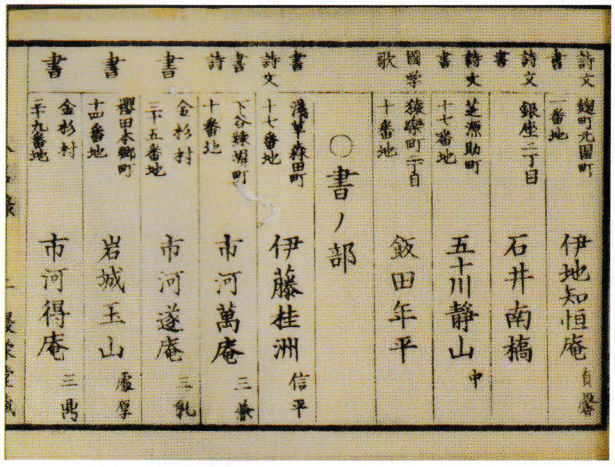
最近発表された盲教育史に関する研究論文（木下知威「点字以前」『一滴』第二六号、二〇一九年、津山洋学資料館）は、五十川中が明治五年（一八七二）開催の文部省博覧会に「盲人往復之書簡　亜国盲院ヨリ携来ル品　二葉」を出品したという事実を取り上げ、彼の経歴を可能な限り明らかにした労作である。同論文では、西洋の盲教育の紹介につとめた辻新次・近藤真琴らとともに、五十川を開明的な「洋学者層」の中に位置づける。

ただし、維新前の五十川は基本的に漢学者であり、藩を挙げての軍制改革の中で高島流砲術を学んだ以外、洋学に接したという事実は見出せない。維新後は菊間藩の公務人・公議人・権大参事をつとめ（『市原市史』下巻、一九八二年）、東京では佐倉藩の公議人・漢学者依田学海らと親しく交際している。そして明治三年（一八七〇）一二月にはアメリカへ留学した（留学時の書類には二九歳と記されるが、慶応元年脱藩事件時に二九歳だったとする史料もあることから、年齢を若く偽ったのかもしれない）。文部省博覧会に出品したアメリカの盲人往復書簡もこの時に入手したものであり、この海外体験が彼を西洋近代の知識に急速に接近させたのであろう。帰国後に奉職した佐賀県・三潴県では学務を担当し、行政官として教育の近代化を推進した。九州に赴任する前の明治六年前半には神田小川町に居住し、慶応義塾に留学した沼津時代の門人間宮喜十郎と数回会うなど（拙稿「間宮喜十郎の東京留学日誌」『沼津市博物館紀要』19、一九九五年）、旧交を温めている。

明治二二年（一八八九）から教鞭をとった京都府立京都商業学校での担当科目は英語ではなく、漢文・習字・作文だった。五十川の採用にあたっては、前の勤務先である東京高等商業学校の校長矢野二郎から推薦があり、「本人儀ハ漢学ニ長シ又英学ニモ相通シ居加之官私之諸事之経験ニも相当候人物ニシテ」と評価されたほか、新任校でも「和漢文商用作文商業地理歴史法規実習」などの学科を受け持たせるこ



『改正増補明治文雅都鄙人名録』表紙（1882年）
当館蔵



五十川中（静山）の名が掲載されている部分

とが想定されていた（明治二二年二月一九日京都商業学校長事務取扱小林端一より第二部学務課あて文書、京都府立京都学歴彩館所蔵「商業学校一件」所収）。岡田良策編『明治文雅都鄙人名録』（一八八一年、改正増補一八八二年）という名鑑には、「詩文書芝源助町十七番地　五十川静山　中」と掲載されており、詩文や書を得意とする文人として位置づけられている。維新後においても彼が立脚したのは伝統的な漢学にあったと思われ、多少英語に通じていたとはいっても、洋学者の範疇に含めるには違和感がある。

また木下論文は、佐賀県の公文書中に押された印鑑などから、「五十川」が「いかわ」と読んだことを明らかにした。ただ、沼津藩士の娘の談話筆記である前掲『老母を圍んで―沼津水野藩士の娘奥居富女聞き書―』（六九頁、元版では七〇頁）には、五十川中について触れた箇所に「いかかわ」というルビが振られている。さらに、沼津藩が久能山東照宮近くの海岸警備にあたった際の記録である元治元年（一八六四）「掌中控」（沼津市明治史料館所蔵）という文書には、「五十川長」の名に「イカカハ　ハシメ」とのルビがある。沼津藩士の五十川家には中の家を含め二系統あったようで、ともに三河国刈谷時代に水野家に召し抱えられた由緒を持つ上級家臣で（「駿藩仕録」『沼津市史　史料編近世1』、一九九三年）、一族だったと思われる。「いそかわ」とするのは明らかな誤りと思われるが（『三百藩家臣人名事典』第四巻、一九八八年、新人物往来社）、「いかわ」か「いかかわ」かについては、はたしてどちらが正しいのかまだ断定はできない。

五十川長の墓
（沼津市　乗運寺）
慶応２年（1866）８月３日没。
通称は左司馬、諱は延寿。

五十川中は、明治四五年（一九一二）時点での名簿（『旧菊間藩士人名録』、一九一二年、私家版、一九八一年復刻、沼津市立駿河図書館）では、大阪府三島郡茨木町（現茨木市）に住んでいたことがわかるが、その後の消息や没年は不明である。

ところで、明治五年の文部省博覧会には、「水野従五位」により「盲人ヲ教ル書　一冊」が出品されており、木下論文によれば、それも五十川がアメリカから持ち帰ったものを旧沼津藩主水野忠敬（従五位）に贈呈したのだろうという。西洋の先進的な盲教育に関する情報が、五十川を通じて水野家の周辺にも広がっていたとすれば、もう一人、見落とせない人物がいた。明治八年（一八七五）にクリスチャンとなり、スコットランド一致長老教会の牧師となった三浦徹である。同派の宣教師・医師だったフォールズは、築地南小田原町にあった三浦の持ち家を借りて築地病院を開設し（『都史紀要十六　東京の特殊教育』、一九六七年）、診療活動のほか医学教育や布教、そして盲人教育の相談も行った。明治九年（一八七六）、フォールズは中村正直・津田仙・古川正雄らとともに楽善会訓盲院（後の官立東京盲唖学校）を設立している。徹の父三浦千尋は、家令をつとめるなど廃藩後も旧主水野忠敬とは密接な関係を保っていた。徹を信仰に導いた宣教師デヴィッドソンは、フォールズとともに来日した人であり、明治一〇年（一八七七）に伝道の拠点とした場所（後の両国教会）は、徹との関係から東京両国矢ノ倉町にあった水野忠敬邸内だった（『日本キリスト教歴史大事典』、一九八八年、教文館）。

三浦徹や水野忠敬が楽善会訓盲院に関与した事実や、五十川中がキリスト教に入信した事実などはないものの、広い観点からすれば彼らが形成した旧沼津・菊間藩のコミュニティーは近代盲教育のスタート地点のすぐ近くに位置していたのである。

余談ながら、三浦徹には「恥か記」と名付けた後年の随筆があるが、その中に一三・四歳だった幕末の少年時代、母の治療のために毎日来宅した「廉の市」という盲人が、自分が敵わないほどの「頗る才子にして強記」だったという逸話を書き残している（『明治学院史資料集』第八集、一九七八年）。よほど印象に残った人だったのであろう。

以上は木下論文にわずかに付け加えることを意図したものであり、それ以外の詳細は同論文を参照されたい。

（樋口雄彦）

令和元年度第１回企画展の紹介

Discover Numazu ディスカバーぬまづ アゲイン
～市民カメラマンの古里再発見～
７月２日（火）～９月１日（日）

昭和の終わりごろ、『広報ぬまづ』誌上で「古里再発見」を旗印とした「Discover ぬまづ」というシリーズが連載され、ここから「ぬまづウオッチング」という企画が派生しました。のべ 57 人の市民ウォッチャーが参加し、写真・イラスト・スケッチなどで「沼津らしさ」を発信しました。作品は広報誌上に掲載されたほか、市役所玄関ロビーなどで展示されました。１点１点に作者のコメントがつけられ、今時のデジタル作品とは違う、手作り感・昭和感満載の仕上がりです。今回の企画展では、あえて手を加えず、当時のままの作品を展示しました。平成にかわる直前の市民がとらえた古里沼津の風景をご覧ください。

ギャラリートーク
７月27日（土）・８月８日（木）・８月12日（月 山の日）・８月18日（日）

午前 11 時から１時間程度４階企画展コーナーで展示解説をします。

８月 12 日にはスペシャルゲストとして、昭和 61 年（1986）の『広報ぬまづ』で連載された Discover Numazu 内で「沼津ウオッチング」を企画した小池一廣氏をお招きして、当時のこぼれ話などをお話していただきます。

史料館からのお知らせ

史料館のキセキ！ 企画展総選挙　結果発表

平成 30 年度第２回企画展「開館 35 周年記念 史料館のキセキ２」で行った企画展総選挙の最終結果トップ 10 をお伝えします。今年２月２日（土）～３月 24 日（日）の開催期間中、約 800 票が集まりました。

10 位	終戦 70 周年特別展 市民が見た昭和の戦争	（平成 27 年７月）
８位	沼津兵学校	（昭和 61 年８月）
８位	江原素六とその時代	（平成４年７月）
５位	興農学園―みかん村とデンマーク教育	（平成 12 年 12 月）
５位	浮世絵に描かれた東海道と沼津宿	（平成 13 年７月）
５位	沼津の交通	（平成 14 年７月）
４位	スルガの古墳～高尾山古墳が語るもの～	（平成 24 年８月）
３位	沼津兵学校の群像	（平成６年７月）
２位	沼津藩の人材	（平成元年８月）

そしてランキング１位に輝いたのは…

１位 明治の戦争と民衆
―沼津市域にみる日清・日露戦争（平成２年８月）

〈館長から一言〉

開館以来、多岐多様なテーマによる７０以上の企画展を開催してきたことと、また、多くのお客様にご投票いただいた結果に深い感銘を受けております。これがまさに当館のこれまでの活動が示す「軌跡」であり、皆様との関係から生まれてくる「奇跡」になっていくのでしょう。

今後も、「いつも何か新しいこと」をご提供できるよう、さらに精進いたしますので、よろしくお願いいたします。

ご協力ありがとうございました！

令和元年５月19日（日）
第 13 回そろくまつり を開催しました

金岡小学校・沢田小学校の有志の皆さんが江原先生の遺業を劇にして演じてくれました。

開会式の目玉 くす玉開き

富鷹会の皆さんと一緒におみこしを担ぎました。

金岡マンドリンクラブの皆さんによる演奏。懐かしい曲にのせ歌声が響きました♪

沼津市明治史料館通信
第138号
令和元年7月25日
編集・発行　沼津市明治史料館
〒410-0051 沼津市西熊堂372-1
TEL055－923－3335
FAX055－925－3018
印刷　みどり美術印刷株式会社

古文書解読入門講座 受講者募集

初めて古文書に触れる歴史ファンを対象に、親しみやすい郷土の資料をテキストとして、かんたんな古文書を読めるようになるための入門講座を開催します。

日時
九月七日～十月五日
十一月二日～三十日
の間の毎週土曜日
九時半～十一時半
（全十回）

場所
明治史料館二階講座室
（臨時駐車場をご用意）

定員
先着三十人

持ち物
筆記用具
くずし字辞典（持っている人）

申し込み
八月十日（土）九時から
電話または直接

受講料は無料ですので
ぜひご参加ください！